

雜報

去る八月二十二日、渡米留學の途に上つた本學の榊原胖夫助手から米國の學界通信が送られてきた。同助手は現在、アーモスト大學、大學院にて交通學・經濟史を研究中であるが、その健闘を祈るとともに、この通信を紹介することゝしたい。

× × × × × × × ×
 アーモストにて 榊原胖夫

先に葉書を出したのですけれど、うつかり Air mail にするのを忘れたので、この方が先着すると思ひます。八月十二日に水川丸のつてから途中二十八日を二回重ね、時計の針を七時間すすめて三日にシアトルにつきました。海は二十四日を除いて頗る快適で一等船客の味を充分味わひました。たゞメニューにかいてある英語がわからなくて辭引をもつて食堂へ行かねばならないことだけがシヤクの種でした。同行の同志社關係者は商學部原教授、神學部山崎教授、女子大中瀬古教授、加藤講師、香里高校西野先生、それにフルブライト教授宮川先生、神學校出の牧師さん二人と賑やかでした。ヴァンクーバー島の陸がみえはじめ、家々がみえはじめた時、はじめに浮んだ考えは日本の家が一つもないということ

とでした。屋根は赤く壁は白く芝生は緑の、豊かな色彩にみちたアメリカ型の家ばかりだ。そしてあの家々の中にアメリカ人という人間の一種が住み、英語というわけのわからぬ言葉を話しているということが殆ど信じられないほどでした。シアトルは實に美しい街でした。

四日はシアトルの街を歩いている／＼買物をしました。というのは汽車は一等寝台のプルマンなのですが、手持ちのお金は僅か三ドルなので、とても食堂車へ行つて食へることができません。そこで、われ／＼は汽車の中でシアトルで買ったものをかじつて行こうというわけです。四日夜、シアトルを發ぎ、Northern Pacific の七日にシカゴへ、それから New York Central の八日朝スプリングフィールドへ、晝ごろアーモストへ着きました。途中、いろ／＼面白い景色や風俗をみ、交通機關についていろ／＼の意見をもちましたが、書きはじめるときりがないのでよめます。

着いた日すぐ、交通學と經濟史の教授であるテーラー氏に會いました。彼は早速 Kirkland A History of American Life と彼自身の本 George Taylor, The Transportation Revolution を示して學校が始まるまでの十日ばかりのうちに讀終るよう示唆しました。そして十三日に再び来て、讀んでわからないところを尋ねなさいというわけです。そのスピードには驚きました。まことに幸運なことに、十日、十一日と經濟史學會の年次大會がアーモストで開かれました。それにテーラー教授は僕の出席を許してくれました。僕はその大

會での只一人の東洋人でした。この學會は實に興味あるものでしたので、以下第一回の學界通信として送ります。

第一回の海外學界通信をお送りしたい。僕がアーモスト大學に着いたのは九月八日のことであるが、まことに幸運なことだ。九月十日、十一日とこの大學で經濟史學會第十回年次大會が開かれることになっていたのである。僕の新しい學問的出發のためにもまことに幸先のよいことなりました。

周知のように、この經濟史學會は "Journal of Economic History" という機關研究誌を發行し、アメリカに在る經濟史研究の一大中心をなしている。本年度の會程は "A History of American Economic Life" という好著を著すの論議に中心が置かれ、Bowdoin 大學の Edward C. Kirkland 博士と、知られる Harold F. Williamson (Northwestern Univ.)、Thomas C. Cochran (Univ. of Pennsylvania)、Arthur H. Cole (Harvard Univ.)、R. Richard Wohl (Univ. of Chicago) の諸學者が就任している。更に大會準備委員には、交通史を専門に知れたる George R. Taylor (Amherst College) を「ヒストリアン」日本でもよく知られたる Harold U. Faulkner (Smith College)、Iverett C. Hawkins (Mt. Holyoke College)、Marshall C. Howard (Univ. of Massachusetts)、Theodore P. Greene (Amherst College) が加わっている。

テーラー教授には僕がアーモストに到着したその日ですぐ會

い、すでに課題の本を與えられていたのであったが、彼は更に本大會に僕の出席を歓迎する旨を述べられたのであった。僕が雀躍して喜んだのは我ながら無理もなう。

本年度大會の共通テーマは "Institutional and Cultural Factors in Economic History" というのであり、ペロダラムのあらましを書くことなのである。

九月十日午前、テーマ "Concepts for the Analysis of Economic Growth" Chairman: Harold F. Williamson
報告 Robert E. Baldwin (Harvard Univ.) "Some Theoretical Aspects of Economic Development"
討論者 Arthur H. Cole, Solomon Fabricant (New York Univ.) Carter Goodrich (Columbia Univ.).
九月十日午後、テーマ "Security Factors in Economic History" Chairman: Herbert Heaton (Univ. of Wisconsin)

報告 Thomas Easterbrook (Univ. of Toronto)
"Uncertainty and Economic Change", H. J. Habakkuk
(All Souls College, Oxford) "Family Structure and Economic Change"

討論者 Roudo Cameron (Univ. of Wisconsin), Fritz Redlich (Research Center in Entrepreneurial History, Horrood Univ.)

九月十一日午前、テーマ "The Social Framework of Economic History" Chairman: W. H. B. Court

(The Univ. of Birmingham)
譯註' John F. Sawyer (Yale Univ.) "The Social Basis of the American System of manufacturing", William N. Parker (Williams Collage) "Industrial Organization and Economic Growth: The German Example"

譯論著' Thouras C. Cochran (Univ. of Pennsylvania), Ralph Bowen (Columbia Univ.)
九月十一日卒業' R. P. "The Social Contest of Economic Change" Chairman: R. Richard Wohl (Univ. of Chicago)

譯論著' Robert S. Werrill (Research Center for Economic Development and Cultural Change, Univ. of Chicago)
"Same Social and Cultural Influences on Economic Growth: The Case of the Caoriri", David E. Apter (Northwestern Univ.) "Same Economic Factors in the Political Development of the Gold Coast"
十一月 金沢講演 Edward C. Kirkland "You Can't Win"

このまじり饒な會長講演をのぞく全報世、討論に出席した。これらの一々の細かな内容なすは、"Journal of Economic History"に發表されるおぼしうか、以て出席して感じをとりながらを簡單にまとめてみよう。

(一) 従來のターミノロジーの不充分をに氣がつくと共に、新

しい概念を形成しようとする努力がなされてゐること。これは大會開始に先立つユール總長の挨拶の中に端的に現わされた。つまり、現實の經濟は前世紀からはるかに進歩してゐるにも拘らず、經濟學者は依然として古い分析の道具概念をしか持つてゐない。そのことが彼の理論を破綻させるまづ第一の原因とならざるを得ないといふのである。

ところで、大會で先づ氣がついたことは、諸學者が概念化することは危険だ、危険だといふ、定義は困難だとしきりに云いながら、絶えず概念化を試み新しい定義をしようとしてゐることであつた。例えば、最近アメリカ經濟史學會の一つの中心的研究となつてゐる entrepreneurial History としても果して entrepreneur というのは何處までを含めるのか、そうかう點にうつて例外のなるだけ少いという意味において、嚴密な定義を與えようとしてゐる傾向がみえる。また例えば、Security とか Uncertainty という言葉の内容をより嚴密に制限して使用しようとする。このような古い概念への疑問と新しい概念への努力が、アメリカの殊に若い經濟學者をして大膽な新しいアイデアに向わせる一つの役割を果してゐるように、少くとも僕には思われた。

(二) 歴史を理論的に解釋しようとする傾向が若い經濟學者の中に現れてゐること。歴史を解釋すること——一般化し法則化することができるかどうかは、古く且つ新しい問題であるが、この國においてそれが一つの問題であることは云うをまたない。アメリカの一般歴史の主流においては、一九二〇年代以前

は解釋されるのがおよその傾向であつた。ターナーや初期のビ
アードがそうであらう。しかし、二〇年代以後はその反動期に
入り、歴史の個別化の方向が顯著である。歴史學は「科學では
ない。文學でもない。それは畢竟するに歴史學である」という
のである。ところで、「經濟史學」という特別の領域が開かれ
て來たのはこの國ではかなり新しいことである。その當初にお
いては、それはやはり歴史を解釋しようとする經濟理論家と歴
史をあくまで個別的にみようとするとする歴史家との集りであつたに
すぎない。そして今日に至つて兩者はほど融合しあうところま
できたが、それにしても、經濟史學を歴史の經濟的強調とみる
立場(多數)と經濟理論を歴史にあてはめて實證する意味で歴
史をみようとするとする立場(少數)の、こういう分類は危險である

と思ふけれどもこの場合便利であることが大まかに言つて存在
するように思ふ。たゞ、アメリカでは學問と學問との間に學問
的にはつきりしたボーダー・ラインを引こうとするような傾向
は少く、協調してゆけるところまで協調し、成果さえ上れば宜
いという式の考え方が傳統的に多い。そればかりか、そうした
協調の上に大きな成果があげられてきたのである。その爲にそ
れ／＼の嚴密な方法論を以て相戦うというようなことは少いよ
うにみえるのである。ところが、最近の理論經濟學の訓練を経
てきた若い野心的な經濟學者たちが、新しいアイデアで大膽に
歴史に向つてゆく傾向が大膽においてみられた。そして亦、そ
ういう傾向が老人クラスのヒンシュクを買つてもいるらしい。カ
メロンだつたか、討論會の時に數式を使つて經濟成長は(人

口・資源・技術・資本 \times)の函數だとやつたとき、僕の横に
坐つていたクラーク大學の教授は僕の方を向いて「あんなのは
どうも好かん」としかめ面をした。勿論、こゝでは歴史を法則
化するといつても、經濟成長の過程とか、uncertaintyが經濟
史に及ぼす影響とか、生産函數と經濟變化とか、entrepreneur
とinnovationとかいう形であつて、殊に景氣理論からの歴史
への接近の傾向がみられたように思ふ。ポールドウインが古典
學派、新古典學派、マルクス學派、シユムペーター等の業績を
自由に渡渉して批評を加えて後、レオンテイエフの input
output の理論を經濟史的に價値があるとして高く評議したの
は印象に残つてゐる。

(三) 問題意識が現代の事情と密接に関連していること。本大
會のテーマだけをみると經濟史家に對する「反學派」の影響を感
じさせるかもしれないが、必ずしもそうではない。寧ろこのテ
ーマはアメリカ經濟史學の、現在の經濟問題に對する深い關心
につながつてゐることを考えねばならない。元來、アメリカの
經濟學は實際的な性格を帯びてゐるといわれているが、現代經
濟の直面する二大問題はこれを所謂自由諸國に限つて云えば、
先進諸國における景氣變動の波と後進諸國における國家の經濟
に對する積極的干渉援助である。又、先進諸國においても國家
の役割を擴大することによつて景氣變動の波に對處せんとして
いる。これらの事實を經濟史的にどのように解釋するか。つま
り、それが經濟史に對して制度的な、文化的なものかどのよう
に反映してゆくかということなのである。換言すれば、文化的

制度的な相異がどの様にその國々の經濟に反映してゆくかを理解することが、いわゆる自由諸國のリーダー的存在であると任ずるアメリカに必要でもあるのである。大會において常に各國の現實の經濟との關連において、各國の經濟史的問題がとりあげられ論議されていたことは注目に値する。

テーマはまた經濟史と他の専門化されてきた歴史との間の關連に關する一つの試みであることも確かである。前世代の歴史はあまりに分化しすぎた。分化は必要であるけれども、歴史はそれにも拘らず一つである。こういう點の認識が經濟史學者の中にもあり、次第に各領域間の關連結合が試みられつゝあるようにみえる。

(四) 問題の廣範性と國際性、十一月午後のいわゆるケース・スタデイの報告をみると、一つはニュー・ジブランドの原人であるマオリ族についての研究であり、一つは南アフリカの黄金海岸の研究である。これらの發表者は何れもそれらの土地に行つてそこで生活し、その歴史を研究した人々である。そして、これらの發表後の討論も最も活潑なものの一つであつた。またどの發表者もかなり自由に各國の歴史を渡渉して自分の結論を導き出す。問題のかたよりが殆どみられないのは感心した。大會の使用語は英語であるが、聞いてみると、實にさまざまの英語が現れる。つまり、大會に参加している歐洲人・南米人などがなまりをもつた英語を話すのである。こうした學會の國際性、國際的協調は全くうらやましいものであつた。

ところで、アメリカの學會が日本の學會と非常に異なるところは話す人が何か必ず云はねばならないようにジョークをとばし人々がどつと笑うことである。實に和やかに、發表にしる討論にしろ進められてゆく。日本の學會だと發表者はしかめ面で原稿を読み、聞く者もしかめ面で聞いていて、發表後の討論も特別なものを除いて非常に少い。ところが、一度懇親會になると笑い聲がどよめき冗談を云ひ合う。その間に距離がある。アメリカの學會では、ちよつと雰囲気が変わつて、その間の距離が少い。食堂などで、大きな聲で笑つては話している、何を話しているんだらうと聴耳を立てゝみると、實に複雑な學問上の議論をかわしているというのが普通だ。良し悪しは別に、國民性の違ひを感じざるをえなかつた。

以上簡單であるが第一回の學會通信としたい。